遠軽町1964オリンピックゆかりの木
～その活用と次世代への橋渡し～

前田 あやの（遠軽町1964オリンピックゆかりの木活用コーディネーター/
北海道森林審議会委員/北海道森林管理局地域管理経営計画懇談会委員）

■オリンピアンが持ち寄った木の種

1964年（昭和39年），日本で初めて開催された東京オリンピックの際，国土緑化推進委員会（当時）の呼びかけで，緑の国際交流として各国の選手団が母国の木の種を東京に持ち寄りました（**写真1**）。

写真1　オリンピックと緑化
（資料：国土緑化十五年史）

44か国272種にものぼった世界各地の木の種は，樹種による生育環境を考慮の上，日本全国に配布されました。各地で記念植樹などが行われながらも，その後，定期的な追跡調査などが行われなかったため，この出来事はあまり知られてはいません。

■北海道へ，そして家庭学校へ

オリンピックを機に日本に集められたこれらの木の種のうち，北海道に配布されたものは，北海道林木育種場（江別市）にて育苗された後，1968年（昭和43年），造林に関心の高かったオホーツク管内遠軽町の北海道家庭学校（以下，家庭学校）がもらい受けました。

家庭学校は，1899年（明治33年）に留岡幸助によって創立された私立の児童自立支援施設で，130万坪の緑豊かな敷地の中に礼拝堂，寮舎，学校などが点在し，男子児童生徒が寮父寮母と生活を共にしながら学ぶ施設です。生徒はそれぞれ作業班に属し，農作業や酪農，木工など生活に必要な作業を担当します。その作業班の一つに，山の手入れをする山林班があります。

家庭学校がもらい受けたオリンピックゆかりの苗は，北海道の代表的なマツ数種類と共に家庭学校展示林に植樹され，比較されました。

その後，山林班を中心に生徒および職員の手入れのもと，160本を超えるオリンピックゆかりの木々が家庭学校に育ち続けていたのです（**写真2**）。

写真2　家庭学校展示林に植樹されたゆかりの木
（写真：株式会社北海道ポットラック）

■東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて

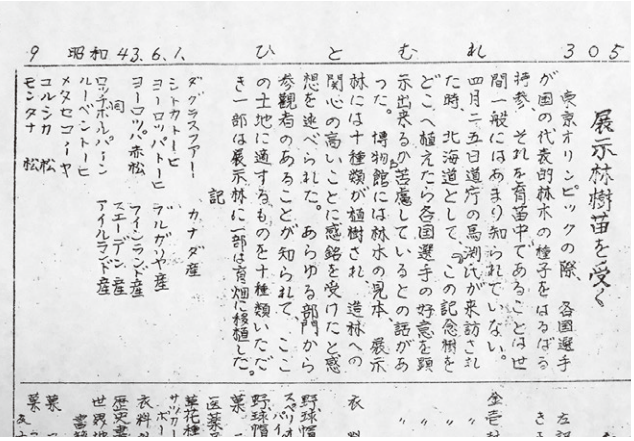
2013年に東京2020年大会の開催が決定し喜びに湧く中，スポーツ写真の第一人者である岸本健氏（遠軽町出身）より，この木の存在があらためて遠軽町に伝えられました。

町では有識者を集め「1964オリンピックゆかりの木活用検討会議」を設置し，東京2020大会への活用に向けて，協議，要請活動を始めました。

その後，この木の存在は，東京2020大会開催を前に，オリンピックの意義を伝えるための博物館を設置する予定であった日本オリンピック委員会に伝わり，関係者のご理解のもと，ゆかりの木をその施設（正式名称：日本オリンピックミュージアム，以下，ミュージアム）で活用することが検討されました。

■学校誌の貴重な記録

活用にあたっては，まず，この木の出自の信ぴょう性や日本各地での生育状況について確認されました。ここで最も役に立ったのが，家庭学校で毎月発行している「ひとむれ」という学校誌です。当時の「ひとむれ」には，何の苗をもらい受け，どのように作業したかの記録が残っていました（**写真3**）。また，北海道林木育種場のオリンピック記念種子受け入れ記録，苗の払い出し記録，苗畑の記録写真等の照会も行い，出自を確認しました。


9　昭和43.6.1　ひ　と　む　れ　305

展示林樹苗を受く

東京オリンピックの際、各国選手が国の代表的林木の種子をはるばる持参、それを育苗中であることは世間一般にはあまり知られていない。四月二五日道庁の馬渕氏が来訪された時、北海道として、この記念樹をどこへ植えたら各国選手の好意を顕示出来るか苦慮しているとの話があった。博物館には林木の見本、展示林には十種類が植樹され、造林への関心の高いことに感銘を受けたと感想を述べられた。あらゆる部門から参観者のあることが知られて、ここの土地に通ずるものを十種類いただき一部は展示林に一部は育畑に移植した。

記

カナダ産
ダグラスファー
シトカトーヒ
ヨーロッパトーヒ
ヨーロッパ赤松
同
ロッチポルパーン
ルーベントーヒ
メタセコイヤ
コルシカ
モンタナ松松

ブルガリヤ産
フィンランド産
エエーデン産
アイルランド産

野球帽
野球帽
衣料
衣料

写真3　「ひとむれ」に残る苗の記録（資料：北海道家庭学校学校誌ひとむれ　昭和43年6月1日号）

それらの中で，ミュージアムでの活用対象となった樹種は，北方系のトウヒやパインの数種類です。当時の資料から，フィンランドやアイルランド，カナダなどから持ち込まれたものであると考えられました。また，あらためて全国の都道府県に情報提供を呼びかけたところ，100本以上のまとまった生育を確認できたのは，北海道だけであることが分かりました。

■針葉樹の活用

ミュージアムの設計施工を担当した株式会社乃村工藝社では，試験的に伐採・製材した木材を確認し，白く明るい木肌，節，柔らかな材の特徴を生かす設計をしました。

・ミュージアム1階の天井全面：
節付きの突板を用いた不燃建材を製作し，形状加工したもの。強度試験を経て採用。（**写真4**）

・カフェコーナー及びオリンピックスタディセンターの棚板等：
突板と他材料を積層した板材や，無垢の木材を形状加工したもの。

・アームチェア，ベンチ：
集成した無垢材を加工し製作した家具（**写真5**）

写真4　ミュージアム・ウェルカムエリア（写真：JOC）

写真5　アームチェアとベンチ（写真：JOC）
壁面には丸太円盤とゆかりの木の説明レリーフ

ミュージアムの一角にはこの家具が設置され，実際に触れることが出来ます[*1]。また，壁面にはゆかりの木の丸太円盤と共に，1964年からの木のストーリーが紹介されています。

*1：新型コロナウイルス感染予防のため，公開を中止している場合があります。

オリンピック・ムーブメント[*2]の発信拠点という目的を持つミュージアムにゆかりの木を活用いただいたことは，56年前に来日したオリンピアンの方々への好意に報いる，何よりの成果になりました。

*2：オリンピック・ムーブメント
オリンピックのあるべき姿（オリンピズム）を

世界中の人々によく知ってもらい，その考え方を大きく広げていく活動。

ミュージアムの1階の「ウェルカムウォール」という壁面には，このゆかりの木で作られた五輪（オリンピックシンボル）に装飾を施したものが多数飾られています。世界中から来館される人達をお迎えする木のオブジェは，オリンピアンから直接オリンピックのレクチャーを受け，遠軽町と新宿区の小学生，家庭学校の生徒たちが製作したものです（**写真6**）。

写真6　ウェルカムウォールと製作した遠軽町の小学生
（写真：株式会社北海道ポットラック）

遠軽町では，このゆかりの木をきっかけに，子供たちが林業機械による樹木伐採の見学や種子採取，播種などを体験する機会を設けています。オリンピックが開催予定の2021年には，この木の種子から育苗された苗で植樹を行う予定もあります。

林業は植樹から伐採まで30年，50年という長期間の計画に基づき行われますが，林業になじみのない一般の方々が木々の生長やサイクル，循環利用を想像するのは容易ではありません。4年に一度のオリンピックという国際イベントと共に，実際に育った木が存在，活用されることにより，林業や林産業を具体的に想像することに一役かっているのです。

■おわりに（まとめ）

今回活用された北方系のトウヒやパインは，北海道産トドマツに特徴が近く，ミュージアムでの内装への用途は，人工林材の使用方法として示唆にあふれるものでした。特に，存在感もありながら主張し過ぎない木材の使い方と，木材以外の材料や要素，照明などとの組み合わせが，見事な空間を織りなしています。オリンピックゆかりの木はプロの手にゆだねられたことにより，もう一度関係者のもとへ形を変えて届けられ，そして多くの方に見て頂けることになりました。

当方では，遠軽町のコーディネーターとして約3年にわたり，各機関との調整や活用プロセス全般に関わってきました。川上から川下までという表現がされますが，森林の調査に始まり，選木，伐採，運搬，用途に応じた各建材への加工から施工，完成までの一連の流れすべてに立ち会うことが出来，代え難い経験となりました。

（参考）

日本オリンピックミュージアム
https://japan-olympicmuseum.jp/jp/
遠軽町
https://engaru.jp/work/page.php?id=653

（執筆協力/資料出典）

遠軽町/北海道家庭学校/北海道/公益財団法人日本オリンピック委員会/株式会社乃村工藝社/公益社団法人国土緑化推進機構/国立研究開発法人森林総合研究所北海道林木育種場